＜論　　文＞

美容整形と「正常」な身体の枠組み
――『エクストリーム・メイクオーバー』、『ザ・スワン』、『Botched』――

大　木　龍之介

はじめに ―― 美容整形を取り巻く矛盾

2012 年 7 月、アメリカのファッション雑誌『セブンティーン』は「身体の平和条約（Body Peace Treaty)」なる試みを提示し、誌面に登場するモデルの顔や身体にフォトショップなどを用いた写真加工技術を一切使用しないと宣言した。イギリスでは広告基準協会（ASA）がランコムやメイベリンなどの化粧品ブランドに対して、モデルの顔を過剰に修正した広告の雑誌掲載を禁止した。さらにフランスでは 2017 年 10 月に、広告やファッションイメージなどに使用される加工が施された人物写真に、「この写真は修正してあります（photographie retouchée)」と明記することを義務付ける法律が施行された。メディアで使用される非現実的なまでに理想化された身体イメージは、見る側の身体に対する不満足感を増幅させ、理想に近づくための過剰な努力を推奨してきた。その結果、一部の読者や視聴者を摂食障害や美容整形の繰り返しなどに陥らせている。フェミニズム／ジェンダー論や精神医学は、理想化された身体への過剰な憧憬が、個々人の身体イメージに与える悪影響について議論

を重ねてきた。これらの試みが着実に社会へと浸透し、ありのままの身体を受け入れることの重要性が広く受容されてきたからこそ、過剰に理想化された身体イメージがメディアを通じて流布されることへの批判が強まったのである。

一方、国際美容外科学会（ISAPS）は、2016 年に全世界で行なわれた美容整形手術の件数が 23,626,909 件であったことを発表した（外科手術 10,417,370 件、非外科的手術 13,209,539 件）[1]。この数値は前年 2015 年の調査結果から、およそ 200 万件も増えている。つまり、メディアにおける極端な身体像を批判し、加工のない身体を称揚する動きが強まる反面、実際には美容整形によって加工された身体を求める人々が増加している訳である。この矛盾は一体、何を示唆しているのだろうか。ナオミ・ウルフは『美の陰謀』にて、美容産業には「女性は美しくなければいけない」という「美の神話」を作り出し、美の水準を引き上げ続けることで個々人の身体に対する劣等感を煽る「脅しのメカニズム」（Wolf, The Beauty Myth 285）が存在すると指摘した。しかし上記の矛盾を生み出しているのは、果たして本当に非現実的な美しさへの強迫観念を与える「脅しのメカニズム」だけなのか。アレックス・クチンスキーは『ビューティー・ジャンキー』にて、美容整形の普及によって「美が平凡なものになってしまう危険性」（Kuczynski, Beauty Junkies 154）を危惧したが、この指摘が現実化してきていると考えられる。つまり、アクセシビリティの上がった美容整形は、美の基準を高め、かつ高い水準で均質化することに貢献しているのである。美容整形と手を組むようにして高められた美の基準について、リタ・フリードマンは「ある基準が相当数の人々によって支持されたら、たとえ社会が正気の閾を越えてしまっていたとしても、その基準が正常な肉体を定義し直してしまう」（Freedman, Beauty Bound 53, 強調筆

者）と述べ、異常なまでに高められた美の基準が、いまや「正常」な身体の基準となってきたことを示唆した。この意味で美容整形は、そこに到達できない自然な身体を「異常」あるいは「逸脱」とみなすような逆説的状況を作り出すことによって、「正常」な身体への到達手段としての役割を担うようになってきたのではないか。

美容整形の領域において、「正常」という語は「自然」や「普通」をも含意する、極めて曖昧なものである。本論で明らかにしたいのは、どのような身体の形象が「正常」とみなされるのかという問題ではない。本稿の目的は、美容整形についての言説の内部で、「正常」な身体がどのような枠組みで語られ、描かれ、見せられているかを紐解いていくことにある。「正常」な身体は、どのように定義され、定義し直されていくのか。そしてある身体が美容整形によって「正常」なものへと矯正される時、「正常」の輪郭を縁取る「逸脱」はどのようにして排除されるのか。これらの疑問を明らかにするために、美容整形に関するリアリティ番組を中心に、そこで描かれる「正常」な身体イメージの変遷を辿りたい。

1.「正常」な身体の変遷

美容整形（aesthetic/cosmetic surgery）とそれによって意味づけられる身体の様相を探るには、形成外科手術（plastic surgery）の歴史を確認する作業が必要不可欠である。というのも美容整形とは、形成外科から派生したものだからだ。アレックス・クチンスキーが述べるように、形成外科は「元来、美貌を目指して生まれたのではない」(87)。元々それは、身体を「正常」な状態に復元するための再建手術（reconstructive surgery）であった。サンダー・ギルマによれば、16 世紀終盤には当時流行した梅毒によって欠けてし

まった「非審美的（unaesthetic)」な鼻を修復する手術が出現し、これが現在呼称される「美容整形」の先駆けとなった（Gilman, Making the Body Beautiful 10）が、「近代美容外科の父」とも呼ばれるチャールズ・C・ミラーらが登場し、美容目的の形成手術を提唱したのは 19 世紀末頃になってからであった。整形手術の歴史についてはクチンスキーやギルマンに加えて、エリザベス・ハイケン、谷本菜穂らの研究に詳しく記されている。本節ではこれらの先行研究を読み解きながら、外科手術とそれによって獲得される「正常」な身体の変遷を確認しよう。

現在形成外科として広く知られる外科手術は、鼻の再建手術に由来する。古代インド大陸の医師であるスシュルタは、姦通罪で鼻を切り落とされた女性に対して、鼻の再建手術をおこなった（Haiken, Plastic Beauty 16)。その後イタリアの形成外科医ガスパロ・タリアコッチは、16 世紀にイタリアで流行した決闘や喧嘩で負傷した鼻を復元する手術を推し進め、「近代形成外科の父」(16）と形容されるほどにその技術を発展させた。スシュルタの例同様に、「欠けた鼻、壊死した鼻、切り落とされた鼻、病気で変形した鼻とは、売春婦、敗者、生物学的不適格者の印」(Kuczynski 93-94）であった 16 世紀において、タリアコッチの推し進めた鼻の手術は、美貌への到達手段というよりは、迫害を受けない状態へ元通りにする、文字通りの「再建手術」であった。

タリアコッチらの推し進めた再建手術は、第一次世界大戦以降広く用いられた。第一次世界大戦では、それ以前とは比べ物にならないほどの強力な爆弾、武器や飛行機の普及によって、兵士の顔や身体が大きな損傷を被った。こうした兵士の身体を元通りに修復するために、形成外科手術が用いられたのだ。そしてハイケンが説明する通り、1921 年には現在のアメリカ形成外科協会の前身団体

(AAPS) が、1931 年にはアメリカ形成外科学会 (ASPS) が組織されるなど、形成外科は合衆国にて急激に発達し、医学分野として確立されていった (Haiken 61)。

ここで、第一次世界大戦で負傷した兵士の身体の回復を描出した文学テクストとして、アーネスト・ヘミングウェイの『移動祝祭日』(1964) の一節を引用しよう。

> その近辺の住人でクロズリー・デ・リラにやってくる人たちは他にもいた。中には襟の折返しのところに戦功十字賞のリボンをつけていたり、戦功賞の黄色と緑のメダルをつけていたりした。私はそこで彼らが手足を失ったハンディキャップをどれだけ見事に乗り越えているかをつぶさに観察していた。彼らのつけている義眼の品質の高さや、顔の再建手術の技術的水準を眺めていた。著しく再建された顔には必ず虹色に輝くような色合いがかすかに見られた。それはまるでしっかりと固められたゲレンデの雪のような色合いだったのだ。私たちはこういう客を学者連中や大学教授といった連中よりもずっと尊敬していた。(Hemingway, A Moveable Feast 73-74)[2]

ヘミングウェイのテクストから読み取れるのは、第一次世界大戦時の形成手術が身体を元に戻すためのものであると同時に、元に戻された身体が称賛の対象でもあるということだ。ヘミングウェイのテクストを美容整形の俎上で論じる高野泰志は、元通りに修復された身体が「正常」な身体としての輪郭を獲得する過程を、次のように説明する。

> 概念上「正常」とされる形から逸脱した身体は、逸脱している

> がゆえに、見る者に身体性を強く意識させることになる。そしてその「逸脱」をテクノロジーによって「修復」された身体は、修復されているがゆえに、逆に規範としての「正常さ」を指し示すこととなるのだ。(高野，『引き裂かれた身体』57)

高野が指摘するように、負傷した身体は形成手術によって「正常」な状態へと復元されるが、この「正常」の配備は回復される前の身体を遡及的に「逸脱」した身体として意味づける。つまり、形成手術による「正常」な状態への復元とは、身体を「その社会の中で受け入れられた、望ましい身体の形そのもの」(59) という意味で理想化された、規範的で自然な身体へ収斂させるものなのである。

「正常」な身体を形成する再建手術の隆盛の傍ら、審美目的の外科手術にはスティグマが付与されていた。第一に、医学の一分野として形成外科が発展する過程で、医師らは美容目的の手術を「よくないもの」として退けようと試みた。ハイケンによれば、当時のアメリカ医師会（AMA）は、儲け主義であり、美容目的の手術をおこない、医学会に属さない医者を「にせ医者」とみなす世論を広めようとした（Haiken 144)。形成外科学確立の背後には、美を目的とした手術をおこなう医師を排除することで、逆に「真の形成外科学」としての再建手術を強調する目論見が存在していたのだ。第二に、19 世紀末頃に登場した「患者をより美しくするため」の形成手術は、ピューリタン的道徳やヒポクラテスの誓いに背く「人間の極めて浅薄で罪深い衝動に迎合するもの」(Kuczynski 97) と考えられていた。第三に、谷本奈穂が挙げるように「身体を自分以外の誰か（神であれ親であれ）がもっているという意識があった」(谷本，『美容整形と化粧の社会学』14)。つまり、健康な身体にメスを入れ、親や神から授かった身体を傷つけるなど言語道断だとする考

えが、美容整形に「よくないもの」のイメージを付与していたのである。

しかし「正常」な身体への再建手術とそうでない美容整形という二項対立の境界線は、次第に曖昧なものとなっていく。再建手術と美容整形の線引きをしたがる医師が存在する一方で、実際には美容目的の外科手術の存在が、形成外科の一般的知名度を上げることに貢献したのである。1923 年に女優のファニー・ブライスがおこなった鼻の整形手術を機に、アメリカでの美容整形への関心度は高まっていった（Kuczynski 99)。つまり形成外科学が排除しようと試みた、積極的に美容整形の広告を打ち出する医師らの活動によって、「アメリカ人は形成外科医の存在を知り、そのイメージを固めた」(Haiken 86）のだ。やがて「キャリアのうえでも収入の点からも、それでは一番おいしいところを逃してしまうことになる」(86）と気づいた外科医たちは、美容整形を形成外科のひとつとして捉え直そうとした。この軌道修正に一役買ったのが、ウィーンの心理学者アルフレッド・アドラーが提唱した「劣等感」の概念である。

「劣等感」の概念がアメリカで熱狂的に支持された 1920 年代から 30 年代、「肉体的欠陥に劣等感をもつ患者たちは、そのせいで経済状態にまで悪影響がある」(156-157）とする認識が広まり、美容整形は外見を向上させることで精神の安定や社会的および経済面での成功をもたらす手段として解釈されていった。同時期の映画ブームとの相乗効果により、美の獲得は差し迫った欲求として定着し、雑誌でも美容整形による変身願望が煽られた（161)。また「第一印象」が失敗と成功を分けるという神話も、1920 年代末に広告メディアによって打ち出され、美容業界の推進力となった（166-167)。こうして美容整形は、「外見における美／醜という軸を、健康／病気という軸に重ね合わせるのに成功した」(谷本 15)。そして、外見的

に劣るとされる身体を精神的な問題 ── 劣等感、コンプレックスや不幸な理由 ── を抱える「逸脱」として病理化することで、美容整形は審美的に「正常」な身体への矯正を通じて精神の「問題」を解決するための、正当な手段となっていったのである。

第二次世界大戦が終わると、女性にとって美しさと若さは性的魅力だけでなく「経済的な安定を確保するのに欠かせない条件」(Haiken 234) となり、中産階級の女性を中心にフェイスリフトが普及していく。第一次世界大戦時には兵士の、すなわち男性の身体を修繕する再建手術が主であった形成手術は、1990 年代に至るまでに女性のものとしてジェンダー化されていった (Gilman 32)。1967 年には ASAPS (アメリカ美容外科学会) が設立され、美容整形は形成外科の一領域として確立された。こうして美容整形は、外見に問題があるとされる「逸脱」した身体を、劣等感やコンプレックスを持たず、性的魅力があり、社会的・経済的な安定を手にできる「正常」な状態へと矯正するものとして、形成外科学の中に組み込まれていった。換言すれば、「正常／逸脱」モデルに吸収されることによって、美容整形はそれ自体に付与された汚名を払拭することに成功したのである。

2．美容整形と「従順な身体」の両義性

ハイケ・シュタインホフが説明する通り、美容整形は今や富裕層や有名人のみに許された行為ではなくなり、多くの人々に自らの身体への加工を可能にすると同時に、美容と消費文化における主要な地位を担うまでに成長した (Steinhoff, Transforming Bodies 46)。しかし 20 世紀後半には、美容整形を含む美容産業全体に対する批判が、とりわけフェミニズムの領域で盛んになる。ナオミ・ウルフ

は『美の陰謀』(1991) にて、母や妻としての女性性の神話が崩れつつある一方で、女性は美しくなければいけないという「美の神話」が登場したことを鋭く見抜く。広告業界や美容産業には、女性は美しくあるべきだとするテーゼを掲げながら美の水準を吊り上げることで、女性に自身の身体に対する劣等感を植え付け、美容整形やダイエットなどを強要する「脅しのメカニズム」(Wolf 285) が存在するのだ。こうした「美の神話」について、リタ・フリードマンは次のように書く。

> 身体イメージは、現実の身体が世間に流布している美の基準にどのくらい近いかによっても影響される。理想の姿と現実の肉体に大きな隔たりがある場合、[...] 大多数の女性が、自分は基準からはずれていると考え、人気のある型に合わせるために、自分を作りかえようとして苦しむだろう。自分の外見がその時の流行に合っていない場合や、変化した自分の身体が以前の身体イメージと合わなくなった場合、身体イメージの心理的再編成が起こらざるを得なくなる。(Freedman, Beauty Bound 52)

フリードマンの述べる通り、美の基準が社会・文化的に変化し続ける以上、たとえ「正常」な容姿の持ち主であったとしても、その外見がその時代における美の基準にそぐわなくなった途端、身体は「逸脱」の領域に引きずりこまれてしまう。同時にフリードマンの論考は、ウルフの言う「美の神話」によって「逸脱」とみなされた身体が、美容整形などの美容術によって「正常」な状態へと矯正されると、美しさがその社会に応じて均質化されていくことも示している。

身体を加工対象として管理する「美の神話」は、ミシェル・フーコーが『監獄の歴史』にて提示した、身体の「規律（ディシプリン）」として解釈できる。つまりそれは、「身体の運用への綿密な取り締まりを可能にし、体力の恒常的な束縛をゆるぎないものとし、体力に従順＝効用の関係を強制する」(Foucault 151) 権力である。さらにフーコーは、規律によって統治される身体は「従順な身体」であると考え、それは「服従させうる、役立たせうる、つくり替えて完成させうる」(142) 身体として拘束されると論じた。フーコーによる規律概念を美と身体の関係に適用するスーザン・ボルドーは、美容産業における自己変革（self-transformation）を「単に主体を変革させるだけでなく正常化（normalize）する実践」(Bordo, Unbearable Weight 255, 拙訳）と表現した。すべての身体改革が同じではないし、また文化的／歴史的コンテクストに応じて要求される身体イメージは異なる。けれども個人の不十分さや欠如という文脈において、美は女性を「正常化（normalization)」させる強力な規律として機能するのである（255-256)。キャスリン・ポルティ・モーガンもまた、フーコー的な「従順な身体」への権力が、科学技術の美の要請に尽力する西洋の産業化された文化を通じて拡散されていると指摘する（Morgan, "Women and the Knife" 154)。社会・文化的に定められた美の基準を満たさない身体に対して劣等感を煽る「美の神話」は、身体を統括する規律＝権力として解釈できる。そして美容整形によって「正常」な状態へ修正されるべきとみなされた身体は、正常化を受け入れる「従順な身体」として再編成されるのである。

しかし、ジュディス・バトラーがジュリア・クリステヴァを援用して論じるように、「安定性や首尾一貫性を定めているものは、[...] 主体を認可し、主体をおぞましきものから差異化する文化の

秩序」(Butler, Gender Trouble 236) である。つまり「正常」な身体を定めるのは「逸脱」とみなされるものの棄却であり、ゆえに「正常」な身体とは「逸脱ではないもの」としてのみ表出される。「正常」な身体が流動的であり、いわば「本質なき身体イメージ」であることは、上で引用したフリードマンの指摘からも理解できる。「正常」な身体とは、それ自体が本質を持たない漠然としたものであるがゆえに、そこに到達することが不可能なものでもある。だからこそ「従順な身体」は、「正常」な身体へ矯正されると同時に、規範的で「正常」な身体と自身の身体イメージとの間に「ズレ」が生じることを認め、完璧でない「正常」な身体へと同一化することを強制されるという、矛盾に満ちた境遇に必然的に配置されるのである。

もし「正常」な身体が到達不可能な幻想ならば、「従順な身体」が、「美の神話」に従順であるがゆえに「正常」の概念を攪乱していくという可能性も、あり得るのではないか。ここではその一例として、「整形中毒 (surgery junkies)」を取り上げたい。整形中毒とは、美容整形を過剰に繰り返す人物を指す用語である。ヴィクトリア・ピッツテイラーの『整形中毒 (Surgery Junkies)』によると、整形中毒者は「社会的に不穏 (socially disturbing)」なものとしてスティグマ化されていると同時に、偏った身体イメージを持つことから「身体醜形障害 (Body Dysmorphic Disorder)」として病理化されるという (Pitts-Taylor, 5-6)。「美の神話」に対して従属的であり、「正常」な身体を追求して美容整形を受けるという点で、整形中毒者は本質的に「従順な身体」と同じである。しかし整形中毒者が美容整形を繰り返すということは、彼／女ら自身が整形手術を繰り返した自らの容姿を、修正すべき問題のあるもの、すなわち「逸脱」の状態に置き続けているということを示唆している。

「美の神話」に服従し、美容整形を通じて「逸脱」から「正常」な身体へと矯正される「正常／逸脱」モデルに則るのが「従順な身体」であれば、過度に従順であるがゆえに自ら「逸脱」した状態に留まる整形中毒者らは、「正常／逸脱」モデルからも文字通り「逸脱」している。むしろ彼／女らの身体に対する考え方の根幹には、ボルドーの言う「プラスティックな身体」── 身体は無限に改善・変化できるものであり、いずれ死すべき運命や史実性といった身体の物質性に反逆できるのだとする幻想（Bordo 245）── が垣間見える。美容整形を繰り返し、それによって自身の目指す完璧な身体を獲得しようとする試みは、身体を無限の加工対象とする「プラスティックな身体」というアイディアを前提としなければ成り立たない。本稿では「美の神話」に対して過剰に従属的であるがゆえに、自らの身体を「逸脱」と捉え続け、美容整形を繰り返す整形中毒を、「プラスティックな身体」として位置づけたい。

「美の神話」に対して過剰に従順であることが、美容整形のリスクや身体性の後景化に繋がっている点については、注意を払うべきである。だが美容整形の繰り返しという行動の中に、「正常」な身体の限界を見出すことも可能だろう。「プラスティックな身体」が術後の身体を「逸脱」として位置づけることは、「美の神話」と美容整形が「従順な身体」に強要する、「正常／逸脱」モデルへの抵抗としても捉えられる。さらに整形「中毒」や整形「依存」という言葉からは、「プラスティックな身体」の欲望の対象が「正常」な身体の獲得ではなく、それを欲望する行為としての美容整形そのものにあることも読み取れる。そしてその欲望する行為を通じて、美に対して過剰に従順な「プラスティックな身体」たちは、達成すべき「正常」な身体そのものが存在し得ないことを、行為遂行的に暴き出す。いやむしろ、彼／女らの従順さそのものが、「正常」な身

体の実現不可能性に依拠してさえいるのである。この意味で、「正常」な身体への自己同一化を断念できず、美に対して過剰に従順な整形中毒者たちは、「美の神話」の内部から「正常」な身体の虚構性を暴き出すような、おぞましき脅威としても捉えられるだろう。

「美の神話」は、「正常／逸脱」モデルに準拠した「従順な身体」と同時に、過剰に従順であるがゆえに「正常」な身体を脅かす「プラスティックな身体」をも生み出す。では現代の視覚文化において、「従順な身体」と「プラスティックな身体」はどのように描かれ、語られ、見せられるのだろうか。次節ではまず、アメリカのリアリティ番組『エクストリーム・メイクオーバー（Extreme Makeover)』(2002-2007）と『ザ・スワン（The Swan)』(2004）における「従順な身体」の描写を読み解く。そして「美の神話」という規律に対する身体の服従として美容整形が機能する仕組みと、いかに「正常」な身体が「逸脱」の棄却によって構築されているのかを確認したい。

3．『エクストリーム・メイクオーバー』、『ザ・スワン』における「従順な身体」

『エクストリーム・メイクオーバー（Extreme Makeover)』は、アメリカのテレビ局 ABC にて放映された、美容整形を題材とするリアリティ番組である。本作は 2007 年までに 4 つのシーズンが放送され、合計 54 ものエピソードが製作（うち 2 つは未放送）されるなど、美容整形を扱う番組としては先駆的な成功を収めた。番組には美容外科医のほかにスタイリスト、皮膚科医、歯科医、パーソナル・トレーナーらによって構成される「エクストリーム・チーム(The Extreme Team)」なる集団が登場し、視聴者の中から選ばれた出演者を、文字通り「劇的（extreme)」に変身させる。

ピッツテイラーはリアリティ番組について、「美容整形の意味が生成される社会的に重要な場」(39, 拙訳) であると表現する。リアリティ番組に出演するのは、役者が演じるキャラクターではなく、実在する人物である。しかしそこでは、出演者が予め選別され、撮影され、そして編集されている。すなわちリアリティ番組は、エンターテインメント性のある人物を意図的に創造し、脚色された状況や出来事を提示すると同時に、見る側にそれらを現実に近いものとして受容させるのである (41)。そして美容整形のリアリティ番組も、意図的に作られたキャラクター、出来事、状況を提示しつつ、実在する医師による手術が実在する患者へと施される過程を描くことを通じて、フィクション／ノンフィクションの境界を曖昧にしていく。

『エクストリーム・メイクオーバー』の番組構成に注目すると、変身前の身体を「逸脱」したものとして縁取るための、あらゆる工夫が施されていることが分かる。本番組はまず、美容整形を希望する出演者の語りから始まる。彼／女らは自身の容姿によって苦しめられた過去 ── いじめ、容姿による差別や偏見 ── のエピソードを、時には涙を流しながら告白する。そこには家族や友人、恋人らの語りも挿入され、出演者がいかに自身の容姿に対して劣等感を抱いているかが明らかにされる。またカメラは出演者を様々な角度から捉えたり、彼／女の写真を挿入したりすることで、出演者の身体が「美しくない」ものであることを視覚的に強調する。番組の出演権利を獲得したことが告げられた出演者は、家族や友人のもとから 6 週間ほど隔離され、エクストリーム・チームのメンバーらの手による容姿の矯正を施される。番組の終盤では、出演者が家族らの待つ場所で変身した姿を披露する、「ビッグ・リビール (Big Reveal)」の場面が訪れる。大変身を遂げた出演者が登場すると、家族らは大

きな歓声と拍手とともに彼／女を迎え入れる。第一節で引用したヘミングウェイのテクスト同様に、術後の身体は称賛されるべき対象として位置づけられるのだ。最後に、術前と術後を比較するための「ビフォー／アフター」の写真が映し出され、いかに出演者が大変身を遂げたのかが、見る側に提示される。

『エクストリーム・メイクオーバー』に出演するメイクオーバー志願者らは、一貫して自らの身体に対して劣等感を持つ人物として描かれる。そして番組は、出演者の変身前の容姿を美の基準にそぐわない「逸脱」したものとして、術後の身体を「正常」なものとして映し出す。出演者が規範的に「正常」な身体へと矯正されるという意味で、本番組は明らかに「美の神話」に服従する「従順な身体」を映し出している。ここで本番組が「逸脱」した身体を否定的に捉えることで、均質化された美の基準に迎合する「正常」な身体を強調していることを示すために、シーズン 3（エピソード 4）に登場するジニーンを取り上げたい。ルイビルに住むジニーンは、全身を黒で統一したパンクロックファッションに身を包み、鼻や耳には 30 個ものピアスを開けた、赤色のドレッドヘアが特徴の女性である。番組の冒頭、「すでにエクストリームなパンクロッカーが、今メインストリームになりたいと望んでいる」というナレーションが流れる。続いて彼女の母親のインタビュー映像が挿入され、母がジニーンの奇抜な外見を快く思っていないことが明らかになる。ここでは同時に、母と外出するジニーンに訝しげな視線を投げ掛ける人々の様子も映し出される。その後ジニーンが「普通の外見になれば、みんな私の他の部分にも気づいてくれるはず」と涙ながらに語ると、彼女の外見は「逸脱」としてしるしづけられる。そして『エクストリーム・メイクオーバー』への出演権獲得が告げられたジニーンに、まず美容外科医のフィッシャー医師が、大きさが均等でない胸を豊

胸手術で整え、腹部の脂肪吸引を施し、鼻の先端を引き上げ、そして指が通るほど大きなピアスホールを縫合する手術をおこなう。並行してジニーンは、パーソナル・トレーナーの指示に従い、ダイエットに励む。続いて皮膚科医であるシャンダン医師が、ジニーンの顔にまばらに生えた毛をレーザーで除去する。さらにファッションデザイナーのベッツィ・ジョンソンは「より可愛らしく、柔らかく、親しみやすい」雰囲気の服装をコーディネートし、ヘアスタイリストたちがジニーンのドレッドヘアをストレートのブロンドヘアへと変え、パンクロック風とは異なるメイクを施す。そしてビッグ・リビールの場面では、胸元が大胆に開いたピンク色のワンピースに身を包んだジニーンが登場し、友人や家族から拍手喝采を浴びる。彼女の母は「この上なく美しい（exquisite)」外見へと変貌を遂げたジニーンを、「モデルにだってなれる」と評価する。そして画面には、硬い表情でカメラの前に立つ変身前の彼女と、笑顔を浮かべる変身後の彼女の写真を並列したビフォー／アフターが映し出される。「ほとんどの人にとって、ジニーンは今普通（normal）に見えている」というナレーションは、彼女が「逸脱」した容姿から見事「正常」な姿へと変貌したことを印象づける。

アニー・バルサモは美容整形による美の均質化に警鐘を鳴らす際、サイバーパンクやスラッカーファッションの「反美学（anti-aesthetics)」が、「自然」な身体というロマンティックな概念を捨て去ってくれるのではないかと期待を寄せた（Balsamo, "On the Cutting Edge" 226)。しかし『エクストリーム・メイクオーバー』におけるジニーンのエピソードでは、パンクロッカーの「反美学」的外見が徹底的に「逸脱」として描かれ、その身体は番組の提示する「正常」な身体という美の基準に適合させられる。さらに興味深いことに、ジニーンのメイクオーバーでは問題のすり替えがおこなわれて

いる。彼女の当初の目的は、ゴスの「逸脱」した外見から「正常」な状態へと変身することであった。しかし彼女の胸を左右均等にする豊胸手術や、顔の脱毛、そしてダイエットは、一体なぜおこなわれたのか。ピアスホールを埋める手術、髪型やファッションの矯正とは異なり、それらの施術とジニーンのパンクロック風の容姿との関連性は、非常に曖昧である。こうした要素が番組の主題でもある「エクストリーム」な大変身を印象づけるためのものでも、ジニーンの術前の外見を「逸脱」とみなすことが、彼女の身体を「正常」とされる規範的状態へ服従させるための免罪符となっていることが分かる。それは同時に、彼女の身体の問題のある部位を選別し、それらを「逸脱」として意味づけ、また書き込むことによってのみ、「正常」な身体が立ち現れることをも示している。つまり、美容整形などの美容術によって「美の神話」という規律＝権力に従属させられる、「従順な身体」としてのジニーンのエピソードは、「正常」な身体が「逸脱」の輪郭を安定させることを通じて打ち立てられていく、差異化のプロセスを描いたものでもあるのだ。

『エクストリーム・メイクオーバー』は 2004 年放送のシーズンにて週間平均 700 万人以上の視聴者数を記録し、美容整形業界にも患者の増加をもたらした（Pitts-Taylor, 60）。しかし出演者のインタビュー内容の捏造や、出演を直前で断られた女性が自殺するなどの社会問題へと発展した[3]ことから徐々に視聴率を落とし、2007 年のシーズン 4 は僅か 4 つのエピソードのみを放送して打ち切られた。本番組には、フェミニズム／ジェンダー論の立場からも批判が寄せられている。ピッツテイラーは、『エクストリーム・メイクオーバー』が、出演者らの身体を病理化することで、「正常」な身体への矯正をドラマティックなものとして演出していると苦言を呈する（66）。こうした番組の構成は、美容整形に対する過度な期待を煽る一方で、

手術による身体的な痛みやトラウマ、長期に渡る手術時間やダウンタイムなどのリスク、そして後遺症や摂食障害などの合併症に関するネガティヴな側面を後景化しているという（71）。

同様の批判は、『エクストリーム・メイクオーバー』と同時期にFOXにて放送されたリアリティ番組『ザ・スワン（The Swan）』にも向けられる。『ザ・スワン』ではエピソードごとに、視聴者から選ばれた整形手術志願者が2人ずつ登場する。外見によるコンプレックスや劣等感を語る彼女ら ── 本番組には女性の出演希望者しか登場しない ── は、美容外科医、歯科医、パーソナル・トレーナーやスタイリストらの手によって「醜いアヒルの子」から「白鳥」へと変身し、拍手喝采を浴びながらスタジオに登場する。出演者らはメイクオーバーの過程で、鏡を見ることを一切許されない。彼女らは全ての施術を終え、スタジオに用意された大きな全身鏡の前に立ち、鏡を覆うカーテンが捲られるまで、自身の姿を鏡の中に見つけることができない。様々な美容術によって「生まれ変わった」彼女たちは、どちらの変身がより「美しさ（beauty）」、「バランス（poise）」と「全体的な変貌具合（overall transformation）」の点で優れているかを評価される。そして勝者には、ファイナリストとして「スワン・ページェント（Swan Pageant）」と称したコンテストに出場する権利が与えられる。こうして全出演者の中から、最も大きな変身を遂げた出演者が選出され、王冠を授かる。

シュタインホフは『ザ・スワン』が、出演者の身体を美、階級、人種、ジェンダーの支配的な文化規範に一致する形へと、強制的に変容させていると指摘する（Steinhoff 43）。またアリス・マーウィックも『ザ・スワン』について、美容整形を個人の問題に対する道徳的に正しい解決策やエンパワーメントとして位置づけることで正当化する、「ボディ・カルチャー・メディア（body culture media）」

の一例であると批判する（Marwick, "There's a Beautiful Girl Under All of This" 252）。その中では「正常」な身体を強制する「美の神話」によってもたらされたはずの身体に対する劣等感が、個人の問題という領域に還元されてしまう。『ザ・スワン』は、「従順な身体」が「逸脱」から「正常」へと変貌する様子を描くと同時に、術後の「正常」な身体を階層化することで、美の基準を吊り上げ、均質化する。しかし出演者らを競わせる『ザ・スワン』の番組構成は、「正常」が「逸脱」の棄却によってのみ生じるだけでなく、その「正常」の内部でさらなる差異化を進めることでしか、最も美しい「スワン」が生じ得ないことをも示している。この意味で『ザ・スワン』における「従順な身体」が「正常」な容姿へ矯正されていくナラティヴの提示や、そこでおこなわれる美の基準の吊り上げは、まず「逸脱」した身体を様式化し、それらを規制するというプロセスを経なければ、成立すらしないのである。

4．「従順な身体」か「プラスティックな身体」か ── 『Botched』

2014 年、アメリカのテレビ局である E! にて、『エクストリーム・メイクオーバー』や『ザ・スワン』のような既存の美容整形番組とは異なる視座を打ち出したリアリティ番組、『Botched：整形手術の光と闇（Botched）』の放送が始まった。本番組は 2017 年までに 4 つのシーズンが放送され、番組で手術を受けた出演者と彼／女らの執刀医であるテリー・ダブロウとポール・ナッシフがスタジオで術後について語り合う『Botched: Post OP』（2014）や、医師らが手術希望者のもとへ出張する『Botched by Nature』（2016）などのスピンオフ番組も公開された。

本作の最大の特徴は、「大失敗した（botched）」[4] 美容整形の再建

手術を主題としている点である。『Botched』では過去の美容整形手術での失敗に悩む出演者らが登場し、数多くの美容整形番組に出演するダブロウと、顔の美容整形、とりわけ鼻の形成術を得意とするナッシフの 2 人が、彼／女らを「正常（normal)」な姿 ── この単語は番組内で頻繁に反復される ── に修復する。各エピソードには 3 人の手術希望者が順番に登場し、彼／女らはまず、なぜ手術を希望するのかを、過去の美容整形の体験や苦難に満ちたエピソードとともに告白する。そしてダブロウとナッシフが待つオフィスでカウンセリングを受け、整形手術を終えると、彼／女らは家族や友人、恋人の前に登場し、拍手喝采で迎え入れられる。この番組構成は、『エクストリーム・メイクオーバー』や『ザ・スワン』と共通している。しかしほとんどのエピソードで、3 人のうち 1 人の出演者が整形手術を断られる。本節ではまず、『Botched』にて手術を受けられる患者と受けられない患者が、「従順な身体」と「プラスティックな身体」として割り振られていることを確認する。そして、「プラスティックな身体」への手術を断る番組構成が、彼／女らの持つ「正常」な身体を攪乱する可能性を排除することで、美容整形における「正常／逸脱」モデルの保持を試みていることを例証する。

どのような患者への美容整形が許可されるのかを確認するために、シーズン 2（エピソード 10）に登場するタニアのエピソードを取り上げよう。モデルとして活躍するタニアは、2011 年にミス・インドの座を射止めたほどの美貌を持つ。20 代前半まで自分の容姿に不満を抱いていなかったという彼女は、元恋人が彼女の鼻について「似合ってないから直してもらえ」と言ったことを機に、劣等感を抱いてしまう。そして彼女は鼻の美容整形を決断するが、手術は失敗し、結果として「ブタのような鼻」になってしまう。カウンセリングの過程でタニアがこうした過去の失敗経験を医師らに告白する

と、ナッシフは「彼女の完ぺきな顔をいびつで違和感のある鼻が台なしにしているんです」と語り、彼女の鼻を「逸脱」として位置づけた上で、整形手術を受諾する。術後、彼女は母親と友人が待つ場に登場し、拍手喝采で迎え入れられる。「私の顔にぴったりの鼻」を獲得したタニアは、術前の状態について「前の鼻も私の鼻に違いないけど大嫌いだったし一生苦しむと思ってた」「でも直してもらえたことで忘れられた」と語る。そして最後にビフォー／アフターの写真が映し出されると、彼女の鼻がいかに「正常」な状態になったかが、見る側に提示される。美を基準とした「正常／逸脱」モデルの中で身体が規範に合わせて再形成されるという意味で、タニアは明らかに「従順な身体」として描かれている。

では反対に、どのような出演者の美容整形が断られるのだろうか。『Botched』には、美容整形を繰り返す人物らが多数登場する。130回以上の美容整形によって顔だけでなく全身の筋肉をもインプラントで作り上げる「ヒューマン・ドール」ことジャスティン、18〜19歳の頃のジャスティン・ビーバーと全く同じ顔にするために美容整形を繰り返すトビー、Qカップの胸を手に入れるために豊胸手術を繰り返すレイシーらである。彼／女らは過去の美容整形で失敗した経験を持たず、より理想的な容姿に近づくための手術を希望して番組に出演するが、全員もれなく手術を断られる。シーズン1の反響を受けて制作された『Botched Reunion: Show & Tell』の前編では、3人がダブロウ、ナッシフと対談し、これからの美容整形の予定を赤裸々に語る。彼／女らに対してナッシフは、時折露骨に怪訝な表情を浮かべつつ、美容整形の目的は「見た目や機能を改善したり――問題ある部分を正常にすることだ」(強調筆者)と説明する。この言葉からは、ナッシフがジャスティンらの外見を「問題ある」身体とみなしていないことが分かる。一方ジャスティン、トビー、

レイシーらは、美容整形を繰り返しつつも満足できず、今後も整形手術を希望していることからも、未だに自身の身体を「逸脱」と位置づけていると解釈できる。つまり彼／女らは、「正常」な容姿を妥協せず追求し美容整形を受け続ける、「プラスティックな身体」として描かれているのである。

ピッツテイラーは『エクストリーム・メイクオーバー』についての論考で、番組が「良い患者／悪い患者」という基準で出演者を選別していたことを明らかにした。「良い患者」とは、健康的になる見込みがあり、真剣で慎重な人物である。彼／女らは自身の人生を変容することを期待してはいけないし、外見を変えることに過度に楽観的であってもいけない（Pitts-Taylor 66）。逆に「悪い患者」は、比喩的であれ字義通りであれ、誰か他の人のような外見になりたいと望み、劇的に外見を変化させ、人生をも変化させたいと望む人物のことである（66-67）。ピッツテイラーによるとこうした「良い患者／悪い患者」の基準は、ASPS（アメリカ形成外科学会）やASAPS（アメリカ美容外科学会）によるヴィジョンであり、この指標とオーバーラップする形で『エクストリーム・メイクオーバー』への出演者が選ばれていたという（67）。つまり『エクストリーム・メイクオーバー』は、「悪い患者」をそもそも番組に登場させないことで、理想的な美容整形患者の様相を提示していたのだ。『Botched』ではこの基準が、「従順な身体／プラスティックな身体」という二元論の打ち出しとして機能している。『Botched』では、術後の身体を「正常」なものとして受け入れる「従順な身体」であるタニアの手術が受諾される一方で、自らの身体を「逸脱」とみなし、「正常」な身体を追い求めて美容整形を続ける「プラスティックな身体」であるジャスティンらは、番組内での整形手術を拒否されていた。すなわち『Botched』は、「悪い患者」としての「プラ

スティックな身体」への手術を承諾しないことを通して、「従順な身体」を「良い患者」として肯定的に描き出しているのである。

美容整形の失敗を題材とし、さらに過剰な美を追求する「プラスティックな身体」への整形手術を拒否する。この意味で本番組は、美の基準を吊り上げつつ整形手術のリスクを後景化する『エクストリーム・メイクオーバー』や『ザ・スワン』とは、明らかに異なる視座を打ち出している。しかし逆説的に言えば、『Botched』は「プラスティックな身体」を否定的に映し出すことで、彼／女らの持つ「正常」な身体を攪乱する可能性を、抑制しようとしているのではないか。美容整形をフーコーの権力論に基づいて論じるモーガンは、美容整形は定義上「選択的（elective）」なものであるが、そこには「(美容整形の）技術を通じて完璧（な身体）を成し遂げなければならないという圧力」(Morgan 157, 拙訳）が存在しており、ゆえにそれは選択ではなく「強制」であると主張する。モーガンの表現を借りると、「プラスティックな身体」を否定する『Botched』には、「美容整形の技術を通して「正常」な身体を成し遂げなければならないという圧力」が潜んでいると言えるのではないか。

このことを示すために、シーズン 1（エピソード 3）に出演するキンバーを取り上げたい。トランスジェンダーの彼女は、23 歳までに 24 回の美容整形を経験している。彼女はこれまでの手術体験を「やりすぎた」と反省し、「もっと落ち着いて普通になりたい。もっと女性らしくなりたいの」と述べる。キンバーが過去の整形体験を振り返りながら「これが終わったら整形手術はもう二度としない」と発言するシーンでは、カメラに向かって「整形を繰り返してきた患者の依頼は引き受けない時もあります。でも彼女は普通の(natural）体を希望していました。いいことです」と語るナッシフの姿も挿入される。そしてキンバーには、ナッシフとダブロウ、

そしてオルター医師の手によって、大きすぎる胸をサイズダウンする手術、繰り返し受けた整形手術で変形した鼻先を下げる手術、そして外性器に陰核を隠す包皮と小陰唇を形成する手術が施される。そして番組の終盤では、手術を終えたキンバーが友人らに囲まれ、術後の身体に満足する様子が描かれる。

前述の通りナッシフは、キンバーが術後の身体を「逸脱」として捉える「プラスティックな身体」から、「正常／逸脱」モデルに還元可能な「従順な身体」へと変化していく様子を、「いいことです」と表現した。キンバーがジャスティンら「プラスティックな身体」と異なるのは、「従順な身体」を選択することによって美容整形を受ける権利を手にしたという点である。つまり『Botched』は、整形手術を施す代償として、術後の身体を「正常」な状態として受け入れる、もしくは妥協することを強制するのである。第 2 節で確認した通り、「プラスティックな身体」は、「正常」な身体を追い求め続けるというまさにその行為を通じて、「正常」な身体が到達不可能な幻想であることを、偶発的に暴き出す。ナッシフが美容整形の目的を「問題ある部分を正常にすること」と説明した際、ジャスティンらはすぐさま「正常って何？」と返答したが、これに対してナッシフは「君らが言うと説得力がある［...］基準はそれぞれだ」と笑いながら答える。ナッシフの歯切れの悪い回答は、「正常」な身体という覇権的な概念が、その追求によって安定性を揺さぶられ、根本的な再考を促されるようなものであることを示しているのではないか。「プラスティックな身体」への美容整形を断り、術後の容姿を「正常」と認めない彼／女らを「悪い患者」として描出することなしに、『Botched』が「正常」な身体を、その脱自然化から防ぐことは不可能である。なぜなら「正常」な身体を攪乱する可能性を持つ「プラスティックな身体」を否定することによってのみ、

「美の神話」という規律＝権力が依拠する「正常」という虚構は、首尾一貫した規則であるかのように振る舞えるのだから。この意味で『Botched』における「プラスティックな身体」の否定的描出は、「従順な身体」に強制される「正常／逸脱」モデルが、いかに「美の神話」の安全弁となっているかを、「プラスティックな身体」の棄却を通じて露呈させていると言えるだろう。

おわりに

本論では美容整形における「正常」な身体が、どのように語られ、描かれ、見せられてきたのかを、美容整形に関する先行研究の整理と、リアリティ番組の分析を通じて例証した。「美の神話」は、規範的でない「逸脱」した身体に対して、美しく「正常」な身体になれと脅迫し、美の基準への服従行為を強要することで「従順な身体」を作り出す。しかしそこでは同時に、過剰に従順であるがゆえに「正常」な身体の非首尾一貫性を暴いてしまう、「プラスティックな身体」も生み出される。整形中毒や整形依存に貼られるスティグマや、『Botched』にて手術を拒否される出演者らの否定的な意味づけは、「正常」な身体の存在／実現不可能性を偶発的に前景化する「プラスティックな身体」をおぞましきものとして棄却し、「正常」な身体の統一性や安定性といった幻想を保持するための、言説実践として捉えられる。この意味で、過剰な美の追及を誘発するメディアの身体表象が批判される一方で、到達不可能な「正常」と自己の身体イメージとの「ズレ」を受け入れることを必然的に伴う美容整形が普及する現代社会の境遇は、本来同じであるはずの「プラスティックな身体」と「従順な身体」を善悪の二元論に還元する、「美の神話」の矛盾が反映されたものとして解釈できるだろう。

フェミニズム／ジェンダー論の領域では、本論で援用したような美容整形を批判的に捉える論考と同時に、谷本奈穂やキャシー・デイヴィスのように、美容整形を肯定的に捉えようとする分析も多く存在する。本論の目的は、美容整形を「善／悪」の俎上に載せることではない。しかし美容整形に対する意見の多様性からは、美容整形が患者の心理的な不安を取り除くものであると同時に、患者を「従順な身体」として「美の神話」の監獄に閉じ込め、「正常」な身体の幻想的性質を後景化したり、また露呈させたりもするという、複雑で両義的な問題の磁場であることが読み取れる。だとしたら、美容整形に対する理解を深める上で必要なのは、整形手術自体を肯定的／否定的に捉える枠組みの提示ではなく、美容整形が身体に意味を与える過程を探り、そしてその意味づけがいかに揺らぎやすいのかを明らかにすることで、美容整形を絶え間ない意味生成の場として認識することではないだろうか。

注

1　International Society of Aesthetic Plastic Surgery による "ISAPS Global Statics"（www.isaps.org/news/isaps-global-statistics）を参照。

2　原文は Earnest, Hemingway. A Moveable Feast. London: Jonathan Cape, 1964. であるが、翻訳は高野泰志によるのものを採用した（『引き裂かれた身体』 66-67）。

3　The Seattle Times, "From "Extreme Makeover" that never was, a tragedy" (www.seattletimes.com/nation-world/from-extreme-makeover-that-never-was-a-tragedy/）を参照。

4　E! ZONE JAPAN の『BOTCHED：整形手術の光と闇』公式 HP (http://www.ezonejapan.com/botched/）に記載されている番組説明では、「botched」という単語が「大失敗」と表現されている。

参考文献

Balsamo, Anne. "On the Cutting Edge: Cosmetic Surgery and the Technological Production of the Gendered Body". Camera Obscura 10, 28(1992): 206-237.

Baskin, Alex., Douglas Ross, Greg Stewart, and Mark Herwick producers. Botched. Evolution Media, 2014-2017. (『Botched：美容整形の光と闇』、シーズン 1、E! Zone Japan、『dTV』、pc.video.dmkt-sp.jp/ti/10013599)

Bordo, Susan. Unbearable Weight: Feminism, Western Culture, and the Body. Berkley: U of California P, 1993.

Butler, Judith. Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity. New York: Routledge, 1990. (ジュディス・バトラー、『ジェンダー・トラブル ── フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社、1999 年)

Christensen, Kim. "From 'Extreme Makeover' that never was, a tragedy." The Seattle Times, 14 May. 2007, www.seattletimes.com/nation-world/from-extreme-makeover-that-never-was-a-tragedy/. Accessed 30 January 2018.

Davis, Kathy, ed. Reshaping the Female Body: The Dilemma of Cosmetic Surgery. New York and London: Routledge, 1995.

Foucault, Michel. Surveiller et Punir: Naissance de la Prison. Paris: Gallimard, 1975. (ミシェル・フーコー、『監獄の誕生 ── 監視と処罰』、田村俶訳、新潮社、1977 年)

Freedman, Rita. Beauty Bound. Lexington and Mass.: Lexington Books, 1986. (リタ・フリードマン、『美しさという神話』、常田景子訳、新宿書房、1994 年)

Gilman, Sander L. Making the Body Beautiful. Princeton: Princeton UP, 1999.

Haiken, Elizabeth. Venus Envy: A History of Cosmetic Surgery. Baltimore: John Hopkins UP, 1997. (エリザベス・ハイケン、『プラスチック・ビューティー ── 美容整形の文化史』、野中邦子訳、平凡社、1999 年)

Hemingway, Earnest. A Moveable Feast. London: Jonathan Cape, 1964.

Kuczynski, Alex. Beauty Junkies: Inside Our $15 Billion Obsession with Cosmetic Surgery. New York: Doubleday, 2006.（アレックス・クチンスキー、『ビューティー・ジャンキー ── 美と若さを求めて暴走する整形中毒者たち』、草鹿佐恵子訳、バジリコ、2008 年）

Marwick, Alice. "There's a Beautiful Girl Under All of This: Performing Hegemonic Femininity in Reality Television". Critical Studies in Media Communication 27. 3（2010）: 251-266.

Morgan, Kathryn Pauly. "Women and the Kinife: Cosmetic Surgery and the Colonization of Women's Body." The Politics of Women's Bodies: Sexuality, Appearance, and Behavior. Ed. Rose Weitz. New York: Oxford UP: 1998. 147-166.

Pitts-Taylor, Victoria. Surgery Junkies: Wellness and Pathology in Cosmetic Culture. New Brunswick, New Jersey & London: Rutgers UP, 2007.

Schultz, Howard, producer. Extreme Makeover. Lighthearted Entertainment, 2002-2007.

Smith, Arthur and Nely Galán, producers. The Swan. A. Smith & Co. Productions, George Paige Associates Inc., and Galan Entertainment, 2004.

Steinhoff, Heike. Transforming Bodies: Makeovers and Monstrosities in American Culture. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2015.

"The International Study on Aesthetic/Cosmetic Procedures Performed in 2016." ISAPS International Society of Aesthetic Plastic Surgery. International Society of Aesthetic Plastic Surgery, www.isaps.org/wp-content/uploads/2017/10/GlobalStatistics2016-1.pdf. Accessed 30 January 2018.

Wolf, Naomi. The Beauty Myth: How Images of Beauty Are Used Against Women. New York: William Morrow, 1991.（ナオミ・ウルフ、『美の陰謀 ── 女たちの見えない敵』、曽田和子訳、TBS ブリタニカ、1994 年）

高野泰志、『引き裂かれた身体 ── ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』、松籟社、2008 年
谷本奈穂、『美容整形と化粧の社会学 ── プラスティックな身体、新曜社、2008 年
「Botched: 整形手術の光と闇」、『E! Zone Japan』、E! Entertainment、2016 年 http://www.ezonejapan.com/botched/、2018 年 1 月 30 日 (最終アクセス)